

調査報告 雲南香港訪書録 1999—2000

多田 伊織

白鳳女子短期大学

1 はじめに

中国での日本書調査は、1999年12月と2000年12月の2回行った。第一次調査は、12月13日から四日間、雲南省と香港で、多田一人で、第二次調査は12月24日から6日間、雲南省と貴州省で、陳捷女史（日本女子大学）と二人で調査に当たった。両次とも短期間の調査ではあるが、いくつかの成果があったので、特に雲南省と香港での調査について報告したい。

中国大陆に伝存する明治以前の日本書調査では、従来西南地域（四川省・雲南省・貴州省）や1997年に返還された香港での調査が、あまり行われていなかった。西南地域については、一つには多くの少数民族居住地域を抱え、四川省の一部を除いては日本からの書籍が流入しそうなという先入観が、いま一つは日本からの交通の便がよくない点が調査を阻んでいた。香港については、返還以前はイギリスの植民地であり、大陸の諸機関との文化交流が制限されていた関係上、大陸で編纂された日本書目録の調査から漏れ、返還後の調査も未だ行われていなかった。

第一次調査では、このような状況を踏まえ、調査が遅れていると思われる西南地域からは、雲南省の省都昆明を、香港では、香港大学と香港中文大学を調査対象に選んだ。昆明を選んだ理由は、かつて西南聯合大学が置かれており、日本書の存在する可能性があったからだ。

第一次調査の日時と機関は以下の通りである。（いずれも1999年）

12月13日 雲南大学図書館

12月14日 雲南省社会科学院・雲南省図書館

12月15日から16日 香港大学馮平山図書館

第二次調査では、第一次調査で発見した雲南大学の医学書についてさらに掘り下げると共に、昆明市内の他の機関での日本書調査を行った。また、雲南大学の日本書が貴州大学旧蔵書であり、貴州が清代の著名な蔵書家のふるさとであることから、貴州省貴陽市でも調査を行った。

第二次調査の日時と機関は以下の通りである。（いずれも2000年）

12月25日 雲南省社会科学院 雲南大学

12月26日 雲南大学

12月27日 雲南師範大学

12月28日～29日 貴州師範大学・貴州省博物館

貴州での調査については、陳捷女史の調査報告に詳細をゆだねることとする。

調査に当たっては、昆明と香港で、次の機関と諸先生にさまざまな便宜を図っていただいた。このほかにもお名前の漏れている方々がある。失礼をお詫びすると共に、謝辞を捧げたい。

雲南省社会科学院 何耀華院長 宋綺副院長 左女亜莎国際交流處處長 陳亜輝研究員

雲南省図書館 外文図書室

雲南大学図書館 王文光館長 楊勇副館長

同善本室 沈継延先生（日本書目録作成者）

雲南師範大学図書室 杜〔聿〕昭女史

香港大学 馮平山図書館（善本図書館）馬泰来図書館主任 胡美華助理図書館主任

同大中文系 馮錦榮副教授

香港中文大学 図書館

2 概要

昆明 大陸での訪書調査には、さまざまな困難があるが、第一次調査では、雲南省社会科学院から調査をお願いする諸単位に直接紹介を受けたおかげで、比較的スムーズに調査を終えることができた。北京、上海、南京などの大都市では必ずしもこういう手法で成功を収めるとは限らないが、今後他の都市で調査を行う場合は、省の社会科学院など上級機関からの紹介は援用できるだろう。雲南大学図書館では、館長が省社会科学院院長と師弟関係にあり、幸運なことに日本語を習得された方だったので、好意的に迎えられ、善本調査が容易に進んだ。

第二次調査では、前回調査に訪れていることもあり、更にスムーズに調査は進んだ。ただし、雲南省では、写真撮影を禁じられた。文物の管理・対外公開に非常に敏感になっているようであった。

諸機関での調査では、いくつかの機関で、閲覧に際して研究協力の費用をもとめられた。大陸の研究機関では、必ずしも研究費が潤沢でなく、外部からの調査には、このように対価を要求されることが多いが、法外な価格でなければ、調査の必要経費として支払うべきだと思う。費用は一律でなく、機関や調査の内容によって任意に決められているようである。今回は百元単位の額をもとめられた。

大陸の機関では、おおよそ昼休みは十一時半から午後二時まで、業務終了時間は午後五時なので、一日に調査できる資料には限りがある。

善本のコピーは不可。古い線装本はだいたい善本に一括収納されているため、調査対象となる明治以前の書籍のコピーはできないことになる。雲南大学図書館善本室では、日本の研究者のために、沈継延先生が特別に自ら作成された日本書目録（稿本）のコピーを許可してくださった。他の機関ではたいていの目録のコピーは不可能で、メモをとることになる。そ

の後、沈継延先生は、更に目録を整理されて、今回の国際研究集會に立派な外国書目録（朝鮮・日本・安南）を携えてこられた。私たちの調査が、この目録の誕生に幾分でも力になったのなら、喜ばしいことである。

香港 香港大学には、京都大学中国学の先輩である馮錦榮先生が勤務されている。調査では、馮先生のご助力を賜り、特別に書庫内の様子を見せていただいたり、日本書を検索していただいたりした。

植民地であった背景から、欧米の大学と同じく、香港大学、香港中文大学共に、海外からの研究者の調査依頼を受け入れている。機関からの館長への依頼があれば、問題なく調査できる。

両大学とも図書館の開館時間は夜十時頃までと遅くまで利用できる。ただし、善本室については、図書管理の観点から、夕方には利用時間が終わる。又、善本については、館長の閲覧許可が必要な場合があり、館長不在の時には閲覧できない資料もある。

香港大学では貴重本のコピーは不可だが、線装本でも普通本扱いであれば、コピーは可能である。

目録はどちらの大学も公開している。香港中文大学では、2000年『香港中文大学図書館古籍善本書録』を発刊したところで、これによって日本書の検索ができる。香港大学では、館内の端末で検索する完全なオンライン目録ができています。ただし、目録採取時に日本書は中国書に紛れて分類されていることがあり、キーワード検索だけでは対象となる書籍の発見は難しい。馮平山図書館を熟知している馮先生のアドバイスがあったからこそ、いくつかの資料を見ることができた。

香港大学の例に限らず、日本書に対する認識は香港・大陸を問わず似たような部分があり、中国書として分類されている場合が少なくない。その点で、雲南大学の沈継延先生、香港大学の馮錦榮先生のような、日中（沈先生の目録では、朝鮮書・安南書の分類もされている）の書籍の異同に詳かな碩学の助けが、今後の調査に大きな力となるだろう。ことに、沈先生が、日本関係資料がそれほど豊富にない昆明にあって、困難な状況で外国書の目録を編纂されたことは特筆に値する。真の知日家としてひそかに尊崇する次第である。

3 日本書の整理状況

両次の調査で訪問した機関の日本書の整理状況は以下の通りである。（◎は日本書の所在が豊富で、目録が存在する機関。○は調査済みの機関。△は未調査の機関。）

昆明

◎雲南大学『雲南大学図書館外国刻本書目録』（沈継延先生作成 2000）日本書あり

○雲南省社会科学院 善本室はあるが、室内に排架されている日本書で閲覧し得たものには特にかわったものはなかった。宋綺先生の「善本書目」稿本には、数巻の仏典の抄本が著録されていたが、整理中を理由に見ることが出来なかった。うち一本は「天和八年」紀年の経巻で、天和八年は日本紀年でも中国紀年でも存在しないことから、

実見して詳細を確認する必要があるだろう。

△雲南省博物館 数巻の仏典の抄本があるが、現在修理中のため、未見

○雲南省図書館 古い日本書はない

○雲南師範大学 古い日本書はなかった

香港

○香港大学 馮平山図書館 香港大学の善本図書館。馮錦榮先生の協力で、目録にあがっていない日本書（伊藤仁斎『古学先生別集』稿本など）を見せていただく。今後、馮先生と協力して、新たに日本書目録を追加する必要がある。

◎香港中文大学図書館 『香港中文大学 古籍善本書録』が1999年完成。整理された日本書については、目録に載っている。

以下には、成果のあった雲南大学と香港大学の調査について述べる。

4 雲南大学の日本書

雲南大学善本室には、沈先生作成の目録によれば、百十三部の古い日本書が収蔵されている。そのうち、調査対象となる明治以前のものは三十三部ある。（沈継延「雲南大学図書館蔵外国刻本書術略」参照）第一次調査では、一人で調査したので、目録中のすべての対象図書を調査することはできず、数部を目睹するに止まった。第二次調査では、主に医書に絞って、二日にわたって閲覧し、できるかぎり書き込みなどを書き写した。雲南大学では、写真撮影が禁じられたので、限られた時間で調査できた点数は数少ない。

沈先生によると、雲南大学に所蔵されているこれらの日本書は、貴州大学旧蔵の善本で、1954年、中国政府の命令により、貴州大学の善本コレクションが、雲南大学、四川大学などに分割贈与されたということである。これは、一度貴州大学が廃校となり、文学部の蔵書については、三分の一が雲南大学へ、三分の二が四川大学へ移管されたのだという。従って、雲南大学所蔵の日本書善本はすべて旧貴州大学蔵にかかるものである。中国に伝来した日本書の流通を調べるためにも、貴州大学、四川大学でさらに調査をして、元のコレクションの全容をさぐる必要がある。現時点では、旧貴州大学蔵日本書の来歴などはわかっていない。

限られた時間で調査しえた書籍の中に、伊澤蘭軒の旧蔵の『華氏中蔵経』が含まれていたもので、以下に紹介する。

5 伊澤蘭軒旧蔵『華氏中蔵経』について

『伊澤蘭軒全集』第八卷所収⁽¹⁾の『酌源堂医書目録』⁽²⁾によると、蘭軒旧蔵書の『華氏中蔵経』は次のように著録されている。（点等は筆者による）

華氏中蔵経 三巻 一冊 収在『孫校六種』中 魏・華陀（撰）

華氏中蔵経 二巻 影鈔清・乾隆壬子（五七 1792）・周錫〔瓊〕校本

華氏中蔵経 八巻 一冊 収在『医統正脈』中

華氏中藏經 八卷 一冊 明・呉勉学校本

(以上 衆病療治の部)

このうち、叢書に含まれていると注記のあるものについては、叢書の部に再録されている。

医統正脈 明・万曆辛丑(二九1601)刊本 四十三部注六部欠 明・呉勉学

中藏經 八卷 一冊

孫校六種 清・嘉慶丁酉⁽³⁾刊本 清・孫星衍

華氏中藏經 三卷

雲南大学の調査では、第一次で伊澤蘭軒手抄本『華氏中藏經』巻下を発見し、第二次で蘭軒旧蔵掃葉山房(周錫[瓊]校)本『華氏中藏經』巻上を目睹し得た。これは第一次調査の時に、伊澤蘭軒の重要性を沈継延先生にお話ししておいたところ、再整理され、それまでは日本人の抄本と中国の古籍という観点から別々になっていた蘭軒旧蔵『華氏中藏經』を合帙して下さったからである。日本人旧蔵の漢籍は、中国に戻って再分類されると、漢籍の部に編入されるので、このような偶然でもない限り、探し当てることは難しい。あとは善本目録の蔵書印に関する記述を丹念に見ていくくらいしか方法はないだろう。

さて、雲南大学の伊澤蘭軒旧蔵『華氏中藏經』は、掃葉山房本であり、巻上が刊本、巻下が蘭軒の手抄本という特異な構成になっている。『酌源堂医書目録』は、上下とも抄本としているのだが、後に述べるように、巻下が先に写され、巻上はかなり後になってから入手されて、どちらも校勘されている。巻下の蘭軒自跋によると、最初、屋代弘賢蔵の掃葉山房本の巻下を抄写し、これを校勘した。後に、巻上のみの不全本を入手、改めて校勘した。『目録』には、不全本の巻上については記述されていないが、こちらにも蘭軒自跋が付されている。おそらく、上下とも抄本とする『目録』が誤っているのではないと思われる。

蘭軒の入手時期に沿って、巻下、巻上について述べることにする。

6 雲南大学図書館蔵(旧貴州大学図書館蔵)伊澤蘭軒手抄本 『華氏中藏經』巻下 療諸病藥方六十道 一冊

正楷写本 屋代弘賢蔵掃葉山房本の写本

体裁

元は十行十八字本だが、抄本ゆえ、十九字、二十字などになる

表紙は後補 無題簽(中国の書目を孔版印刷した更半紙を裏返して用いる。貴州大学旧蔵時に補ったもの)

本の表紙は、粗い繊維の混じった灰褐色の紙。

やや虫損。薄葉紙の間にやや厚い白紙を裏打ち

所々に「国立貴州大学図書館蔵書之章」の楕円印を押す

一表 伊澤氏酌源齋図書印

目録 萬応図

第一葉のみ格あり。原本の体裁を忠実に写したもの。この葉は裏打ちなし 以後、無格
藍点
朱字にて校勘書き入れ。主に孫星衍本による。別人による再校がある。

伊澤蘭軒の校勘

「」は校異 □は空格 {} は孫本による補訂

一表

沢瀉「一」両 八孫

一裏

「後」葉 后孫

芸臺二両 炒孫

「□」 龜甲三両孫

醋炙

二表

未動「再服」 再服二字 孫本細字

「小兒妊婦及老人□與服」 按闕文（割注は原注）

疑不字

頭注 孫本 小兒以下細字而與服字接 人下作勿服

二裏

膈氣…「夜一服」 三字細字孫

「成」勞 盛孫

「日三服、漸安減服」 七字細字孫

大小便…「未通加至七元」以下細字孫

九種…「立止」 細字孫

脚氣石楠湯…「每日食前服」以下細字孫

三表

胎衣…「焼秤紐」 稱孫 鍵同 「□」 {通紅孫}

三裏

剥離裏 貴州大学の印

卒心腹痛条

如常服一丸…「毎日二服」以下細字孫

四表

安息香丸条

右為米、煉蜜成「臍」 劑孫

四裏

化下四「元」、圓孫

老幼皆一「元」 圓孫

六表

起蒸中央湯条

彈子大一「元」 圓孫

補藥麝臍圓

白朮 孫本以下有二字空處

六表

醉僊丹条

大附子三「兩」 箇孫

七表

靈烏丹条

空心酒下七「元」、加至十「元」 圓孫下同

扁鵲玉壺丹条

〔衣去〕萬「病」 痛孫

七裏

右以新炒飲為丸…下十「元」 圓孫

葛之真人百補高宗精圓

廟諱

杜仲三兩 「削」去「麤」皮〔坐刀〕碎

孫无 孫无

十裏

治心痛不可忍者条

木香 蓬木 各一 乾漆 一分

兩 炒

右為末、每服一錢、熱醋湯調下、入口立止

(有添紙)

永類〔金今〕方引中藏經九種心痛欲死、木香栽朮乾漆炒等分、細末、熱醋湯調一錢、一口即止 取長虫、兼治心痛方条

「雄黃 一

錢」

頭注 孫本 雄黃一錢四字

十一表

治虫毒方条

雄雀糞各「□」 一孫

兩

十一裏

治虫毒方条

「其」水和成油「〔斂〕」

共孫 餅孫

破棺丹条

丹砂一両 研孫

白細

十四表

通中延命「元」 玄孫

十五裏

百生方条

米飲調「下」、立効 一分孫

治漏胎「腸」損方 胎孫

白茯苓 孫本以下有

二字空処

治婦人「月」崩方 血孫

十六表

治婦人月崩方条

枳殼 二錢

「麩」炒

頭注 孫本麩作麴

三不鳴散条

取水…下割注 取活者「不如後法麝香酒飲空心下」

頭注 按、孫本取活者下作一箇如後法射香酒食空下

甘草湯条

解「百」藥毒 方孫

十七表

槐子散条

槐角中黒子

用孫

各一服「□」已止 病孫

十七裏

治暴喘欲死方条

若虛人肺虛「胃」冷者 孫无

十八裏

千金膏条

黄丹各「一」 分孫

錢

十九表

香鼠散条

香鼠「□」 皮孫

二一表

又取黃丁方条下

陸本元

控一行孫

二一裏

治青丁方 止

二二表～二五表 跋語

余少讀華陀伝…

案、宋樓鑰跋華氏中藏經云々

樓鑰 攻「媿」集六九

二五表 書凡一卷、後附方六十道、因為上下二卷云。

乾隆五十七年秋九月茂苑周錫「瓚」識

於楓橋之香巖書屋

二五裏 伊澤蘭軒自跋

清周錫「瓚」取校刻中藏經上下二卷、屋代弘賢君之所藏也。頃假借來讎之、今行吳氏刻本而上卷病論者可校而理之。下卷藥方者前後多少淆錯無狀矣。因影鈔下卷云。

文化甲子臈月「珙」

伊澤 恬識

「伊澤信恬」印 「字澹父」印 「信恬？奇書自鈔」印

伊澤蘭軒の識語にあるように、この手抄本は、文化元年（1804）当時行われていた明・吳勉学等校刊本（医統正脈本）による『華氏中藏經』の下巻の「療諸病藥方六十道」に錯簡が多いために、清・周錫「瓚」の掃葉山房本（清・嘉慶五年（1800）刊）巻下を屋代弘賢に借り、写したものである。朱注は、孫星衍の平津館叢書本（清・嘉慶十三年（1808）刊）と周本との校異を付している。時に蘭軒二十八歳である。

管見の及ぶ限り、『中藏經』巻下自跋は、他に著録されていないようである。今後の調査にもよるが、あるいは新発見資料であるかもしれない。

この二年後の文化三年、蘭軒は長崎奉行曲淵和泉守景露の赴任に随行して、長崎へ向かった。長崎では多くの文化人と交流したが、その内には、日本との貿易のために訪れている中国人も含まれていた。森鷗外の『伊澤蘭軒』その五十三によると、長崎逗留中の文化四年二月、張秋琴に面会し、その後手紙で、掃葉山房本の校勘に関連して、次のように尋ねている。

至貴朝、則一大信古考摛之学、涌然振起、注一古書、必讎異於數本、考証於群籍。…只怪未見古医書之有考証者。近年有楓橋周錫「瓚」所刻華氏中藏經。全摛宋本、而其脱文處、由吳氏本補入。每下一按字以別之、不敢混淆。雖未得考摛之備、蓋信古者也。其他似斯者、亦無見矣。謹問貴邦當時医家流、於信古考証之学、其人其書、有何等者歟。

7 雲南大学図書館蔵（旧貴州大学図書館蔵）伊澤蘭軒旧蔵 『華氏中藏經』卷上 一冊

半葉十行、行二十字。黒口、双辺。

第一篇の第八葉の一部が破れており、蘭軒の手で補修した上で、頭注が付されている。現在は、虫損のために痛みが激しい。

『華氏中藏經』の校勘については、長崎から帰府した蘭軒の胸中であって、永く去ることのない課題であったようだ。卷下を抄写してから二十二年後の文政九年、念願の掃葉山房本を卷上だけの不全本ながら蘭軒は入手した。これが、雲南大学所蔵のものである。

卷上も卷下同様、貴州大学で補綴されているが、卷上には原表紙の断片が挿入されていて、もとの体裁を知ることが出来た。表紙は香色、薄葉紙で裏打ちされている。題箋には墨で「華陀中藏經」とある。表紙には墨でさらに「慶豊□（恆か）」という文字、「一九五四年貴州大学撥交雲南大学」の印がある。

封面の「嘉慶庚申年〔鐫〕 中藏經 掃葉山房藏板」は朱刷り。第一葉に「伊澤氏酌源圖書印」、朱注および墨注があり、藍点が付されている。

藍点は、第一次調査の時には分からなかったのだが、第二次調査で卷上を見て、後に伊澤蘭軒以外の人物がこの『華氏中藏經』二冊を入手、蘭軒の校勘を再校しているものであることが判明した。

卷上は、卷下よりも更に詳細な注が付されているのだが、第二次調査では写真撮影が許されなかったため、時間が足りず、すべての校勘を写し終えることが出来なかった。なお、卷上では第五篇第四葉遺稿には朱注はない。特に重要と思われる卷上末の蘭軒自跋をあげることとする。□は虫損などによる欠字、【 】は慶応大学所蔵「蘭軒隨筆」中の「中藏經」⁽⁴⁾との異同、〈 〉は「中藏經」で増えている字である。

卷上末 伊澤蘭軒自跋

呉勉学所刻中藏經八卷、其第六卷治傷寒咳逆方与朱肱活人書所引扁鵲中藏經丁香散□【主】治方全同。朱氏所称即指此本【書】也。近代清舶齋來中藏經有【無有字】二種、一爲周錫〔瓊〕校本、並出於元人写本。但【無但字】是一源、其論証【辨】与此本同。但字句頗有異耳。【而】至藥方則僅□【六】十道而丁香散無載。

按、鄭樵陳【振】孫□【著】及宋芸文志〈並〉云、中藏經一卷、則□【周】孫二氏固宜爲真矣。而吳本之源者、蓋宋代別有扁鵲中藏經而好事士合【混】爲一書、分爲八卷也。若其朱氏所引者、猶爲合併【無爲合併三字】已前本矣。今時文運之昌、古書同題【日顯】、藏書家勤求其近於古者。故此書應爲周孫二氏本爲貴、則吳本遂屬蔑如。不知吳本之源【出】於宋代、應【亦】不可廢也。因表章云尔。

丙戌清和月十二日 伊澤信恬記於三養書齋

この跋文は文政九年（1826）四月、亡くなる三年前につくられたもので、森鷗外『伊澤蘭

軒』その百七十三では、「吳刻中藏經跋」としている。最晩年に、蘭軒はようやく二十数年来の宿願を果たし、呉・周・孫の三本を比較、呉本の採るべきところがあると認めたのである。

巻上末には、「伊澤信恬」「字澹父」「師古齋讎書千卷雜朱黃？」の三印がある。

8 伊澤家からの流出経路

伊澤蘭軒の蔵書は、割合早く散逸しはじめたようである。『中藏經』巻下の本文末となる第二十一葉裏に次のような書き込みがある。

嘉永甲寅十月廿九日於辰口直舎以孫星衍所校本一校了、源淳

嘉永七年（1854）に、源淳なる人物が、伊澤蘭軒の『華氏中藏經』二巻を入手し、平津館本によって再校したことを示す。源淳なる人物については、まだ不明である。再校は、朱注によって、蘭軒の校勘が正しければ「同」と記し、異議のあるときは、最初は藍書しようとしたようだが、最終的に朱書になっている。両次の調査で、雲南大学の日本医書を目撃したが、うち『存誠藥室叢書七種』には、蘭軒もしくは源淳と同じ手になるようにみえる二種類以上の書き込みがある。推測では、酌源堂の書物の一部が幕末に流出、うち源淳に渡った分は、考証の資料となった上で、さらに流出、最終的に貴州大学に収められることとなったようである。

茨城大学の真柳誠氏のご教示によると、現在日本には伊澤蘭軒旧蔵本はほとんど残っておらず、ことに手沢本は貴重とのことである。

9 香港大学

前述のように、香港大学図書館では、蔵書目録をオンライン化しているが、馮先生の実見するところでは、日本書の整理状況は十分とはいえないということである。日本書の扱いに慣れていないのが原因である。未整理の書籍も少なからず存在するということだった。

香港大学では、イギリス統治中に多くの古籍コレクションの寄贈を受けている。特にJ. R. MacEwan氏旧蔵のものには、中国書、日本書を問わず善本が多い。MacEwan氏は香港在住のイギリス人で、古籍に興味を持ち、いろいろなジャンルの善本を集めていた。コレクションは氏の没後、遺族によって香港大学に寄贈された。（コレクションとして別置されてはいない）このなかに、伊藤仁斎の『古学先生別集』の稿本が含まれていたもので、以下に紹介する。

10 J. R. MacEwan氏旧蔵伊藤仁斎『古学先生別集』稿本一冊（香港大学蔵）

表紙は灰色、題簽に「古学先生別集」。

『古学先生別集』稿本は現在一冊。目録によると

一表

卷之一

易乾坤古義 附大象解

卷之二

仁斎日札

読近思録鈔

附 古学先生和歌集

送水野防州公序

(一裏は白紙)

となっている。

しかし、実際の内容は、

二表～二四裏 易経古義

二五表～三四裏 大象解

三五表～五二表 仁斎日札 (止)

と目録の途中で終わっているの、本来は二冊以上あったと思われる。

本文中には、異筆の校勘が随所に付されている。刊行を前提とした校正であるかもしれない。

『国書総目録』では、『古学先生別集』は、次の写本二本が知られている。

国会図書館本 宝暦十四年写 四冊

天理大学本 宝暦十四年写 五冊

天理大学本と国会図書館本とは冊数が異なるので、どちらかが香港大学本と関係するかもしれない。

なお、香港大学には他にも興味深い日本書・日本人旧蔵書がある。たとえば、島田翰旧蔵の『春秋左伝注疏』は、第九冊の第二十一葉と第二十二葉が欠けており、島田翰が自分で別本から抄写し二葉を補っている。

11 今後の調査について

第一次の雲南・香港の調査から、両地域にも日本書が数多く存在することがわかった。貴州大学旧蔵本のなかに伊澤蘭軒手抄本が含まれていたことから、第二次調査では、医書を中心にして、貴州大学旧蔵本の再調査を行い、伊澤蘭軒旧蔵書については、ある程度の流出経路がわかった。『中蔵経』巻下の自跋は新発見資料の可能性も出てきた。『中蔵経』巻上の例からも分かるように、日本人旧蔵の漢籍は、それと分からなくなっている。伊澤蘭軒旧蔵書をさらに雲南大学や四川大学で走査するためには、『酌源堂漢土医書目録』『酌源堂皇朝医書目録』と現地の目録を照合するのが、もっとも効果的な方法であろう。『中蔵経』の自跋のような書き込みの形で存在する資料が、更に発見もしくは再発見されることも考えられる。

香港については、香港大学で未整理の日本書をさらに調査する必要がある。未整理書籍については、現地の研究者の協力が不可欠である。香港中文大学については、目録が出版されたばかりで、これを手がかりに調査が可能だ。

注

- (1) オリエント出版社 全八巻 1998年 『伊澤蘭軒全集』の閲覧については、オリエント出版社にお世話になった。謝意を表したい。なお、同全集は現在版元品切れである。
- (2) 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 編者未詳『酌源堂漢土医書目録』『酌源堂皇朝医書目録』合綴本 一冊 杏三六五三 阿倍氏蔵印
- (3) 嘉慶に丁酉はない。丁酉は道光十七年(1837)。孫星衍本は清・嘉慶戊辰十三年(1808)刊。
- (4) 『伊澤蘭軒全集』五巻所収 慶応大学医学メディアセンター 富士川文庫蔵